

はじめに：「日常空間における詩の生成と発展」

片岡邦好
(愛知大学)

2020年度のシンポジウムは、昨年度のシンポジウム「ことばの詩、生活の詩、社会の詩——日常性の中のポエティックス」の対象をさらに広げ、4名の登壇者の方をお迎えして、昨年度に引き続き「日常の詩」の多彩な側面を切り開くご発表を依頼した。まず梶丸岳氏（京都大学）には、秋田県における即興的な掛唄のコンテストにおける考察に始まり、山口征孝氏（神戸市外国語大学）には認知科学における「こころの理論」にもとづいて、進化論的視点から「詩」の発生の起源について考察をいただいた。それに続き、井出里咲子氏（筑波大学）には昨年の Black Lives Matter 運動に端を発するデモにおける参加者間の議論における相互行為を、最後の浅井優一氏（東京農工大学）にはメラネシア・フィジーにおける首長即位儀式にまつわる広義の「詩学」実践というテーマで、ご発表いただいた。いずれも大変深遠かつ広範な射程から「詩」を考察、分析していただき、まずは登壇者の皆さまにこの場をお借りして謝意を申し述べたい。

本報告書を初めてご覧になる方のために、本シンポジウムにおける発表要旨を以下に再掲させていただく。

❖ 梶丸 岳（京都大学）

「繰り返される掛唄：唄を支える韻律と唄を生み出す工夫」

秋田県の2か所で行われる大会で現在も歌われている「掛唄」は、仙北荷方節の旋律に七・七・七・五の歌詞を即興でつけて掛け合う伝統芸能です。歌い手たちは即興詩人さながらに相手の唄に応じて唄を返していきますが、そこには大小さまざまな繰り返しが見られます。本発表では掛唄に見られる繰り返しの型とその意味を探り、掛唄を支える韻律の在りようと歌詞を即興で生み出す工夫を読み解いていきます。

❖ 山口 征孝（神戸市外国語大学）

「ディスコース分析から心の理論を捉え直す—『詩的』構造を進化論から再考する」

進化論的人類学では、霊長類の中で文化の累積的蓄積は人類に特有であるとしています。本発表ではそのような蓄積を可能にするものは何か、という問いに談話分析から接近を試みます。そのために、他者との意図の共有を人間特有の能力と考える「心の理論」を援用し、会話に見られると「繰り返し」と「同時笑い」という現象を再考します。結論として、進化論的視点から「詩的」構造をマルチモーダルな現象として解明することが今後の課題であると論じます。

はじめに

❖ 井出 里咲子（筑波大学）

「公共性×詩のカージョージ・フロイド事件におけるデモと詩の生成」

私たちが他者と出会い場を共にする時、そこにはつながり合いに志向した儀礼的ふるまいが存在します。こうしたふるまいは歴史文化的な身構えに支えられ、反復的そして創発的に公共空間を構築します。本発表では、2020年5月に米国ミネアポリスで起きたジョージ・フロイド事件を発端に生じたデモから、公共の詩としてのことばの力について考えます。特に対話的に怒りや悲しみといった情動が秩序化され、価値が体系化される過程を分析的に論じます。

❖ 浅井 優一（東京農工大学）

「分人性のポエティクス：書記された彼岸から今ここの儀礼へ」

南太平洋にあるフィジーでは、19世紀に始まる英領植民地期以来、人々や歴史に関する様々な知見が文書として記録されることで、近代社会としての秩序が形成されてきました。近年、そうした文書の内容が疑問に付され、文書の偽製性を儀礼の実行によって知らしめようとする出来事が顕著になっています。社会を規定する文書の効力が失墜する一方、儀礼という詩的行為が放つ喚起力、そこに横たわる「分人性」に社会秩序の審級を見出す現代フィジーについて考察します。

これらのテーマに通底するのは、「詩」を専門家や職業詩人によるのみならず、さまざまな記号媒体との協働による社会的、相互行為的実践と位置付けることで、日常のいたるところに見出すことができるという視点である。具体的には、(1) 有相無相の「テキスト」（認識可能となった表出形式）を、(2) 言語、身体、事物、環境との共創において体現した暗黙知と捉え、人間の言語、ひいては記号使用に共通する普遍的な活動であると再認識することができる。その視点に立ち、本シンポジウムでは歌唱、儀式、デモ、語りといった日常の中に詩的实践を見出し、詩的パフォーマンスが達成する社会的意義を伝えていただいた。新たな知見と知的刺激を多くの方に享受いただけたと信じる。

最後に、オンラインでシンポジウムにご参加いただき、議論にご参加、ご清聴いただいた皆様、本シンポジウムを主宰していただいた愛知大学人文社会学研究所に改めて深く感謝申し上げます。